

『児童心理』一九六五年十一月（児童研究会／金子書房）

## 成績を気に病む子ども

矢口 新

数人の子どもに成績が気になるかと聞いてみた。しばらく考えてどの子どももみな同じように大して気にならないと答えた。しばらく考えたところがわたしにはおもしろく感じられた。結論としては、気にならないと答えるのが妥当である——と考えたのではないかと思われるふしがあった。全然気にならないのではないことを、暗に語っていると想われた。しかし、やはり気になるといふほど気にはなっていないと自分では判断したようであった。だから気に病むというようなことではない。時折かすかに気がかりな気持がどこかを走りすぎるといふようなことであるらしい。

そこで、わたしは根ほり葉ほりいろいろと聞いてみた。

今時の子どもは一般的にいえば、大して成績なんでもの気にならないのが普通のようなのである。しかし全然気にしないといふことではない。そういつてしまえばうそになるようである。しかし気に病むというようなことはまず普通の子どもにはないといつてもよさそうである。気に病むというのは、気にするより少し重症だといふようにことばを使つてみる。全然気にしないのではないといふことは、気になる時があるといふことらしい。どういふ時かといふと、いちばん純真なのは小学生の答

えであつた。通信簿をもらう時であるといふのである。玉手箱をあける時のような不安やら期待やらがいきりまじつてゐるらしい。しかしあけてみたら、なあーんだと思ふことが多いそうである。このなあーんでは万感がこもつていておもしろい表現であつた。他に言ひようがないのである。つまり成績がたとえよくてもわるくても、どちらにしても大してかわりはないといふことらしい。それはそうである。そう大きな変化があるはずはないのだから——、結局は予想通りといふことなのであろう。しかしそこが子どものおもしろいところである。案外ほんの一瞬ではあるが、子どもはかけを楽しんでゐるのかもしれない。そうなることはこれは気にするなどという心境ではない。まして気に病むなんていふこととは縁が遠い。

中学生や高校生は、成績などといふことには、もつといじめられてゐると思つたが、案外そうでもなかつた。もう免疫性をもつてゐるからだとも感じられたが、しかしなかなか複雑な心境であるようである。テストは気になるほどではないといふのである。話してゐるうちにわたしもだんだんわからなくなつたことがあつた。それは成績とはなんだといふことであつた。実際にそういう質問をする中学生もいた。一つ一つのテストで、しまつたと思ふことは多いが、それだけだといふ生徒もいた。成績とは順位のことか、順位を発表されると、ちよつとしゃやくにさわることもあるが、ただその時だけだといふ中学生もいた。高校生になると、これはもつと複雑であつた。一般的に成績なんでものより、入学試験の方が気になるといふのである。通信簿なんでものには、なるほどもらった時、劣等感を感じるが、その時だけで、自分で、そんなものは忘れようと思ふし、けつこう忘れてしまふといふのである。これはやはりストレス解消のテクニックを心得た立派な

おとなだと感じたのである。

小学生にも案外そんな知恵はあるのかもしれない。しかしそこまでいう子どもはいなかった。

小学生が、成績が気になるのは、通信簿をもらう前の日だそうである。どうしてそうなのかというと、通信簿をもらって、家へもって来る時に、母親にみせる時のことがいちばん頭に来るといっているのである。

おかあさんがうるさくいうのが、いちばんかなわないという。自分で点が変わる時はいやだなあと思ったり、こんどは一生けんめいやろうとちよつとは思うけれども、おかあさんに、ああがみがみいわれてはやり切れない、やる気もなくなってしまうというのである。

おかあさんにほめられたらとてもうれしかったという。こんどがんばれといわれて、それがうれしかったという子どももいた。そこには子どももやはり成績というものを多少は気にしているということがよく感じられる。しかしそれでも、気に病むというようなことばで表わすような心境ではないらしい。そんなにじめじめしたものではないようである。特に成績そのものについては、子どもは案外朗らかだといつてよさそうである。そんなことより毎日の生活の中で、子どもはお互いに、相手を認めて、友だちづきあいをして、それぞれ実力を認めている。それはそれで子どもは納得しているのである。だから成績などというものをあまり重要視しないのではないか。

もし気に病むということがあるとしたら、親の方の心境が子どもに影響しているのではないか。気に病むというようなことは、やはり病的なのではないか。そして、それをつくっているのは親ではないか。成績そのものではなく、成績がわるいのはいけないことだという観念

を親がもちすぎるからではないか。あるいはそれをよくすることが非常に大切なことだというように、無常な心境を子どもにつくらせる親がいるからではないか。

それは子どもが成績を気に病むのではなく、成績を気に病む親の病的心境に子どもが支配されている、暗示にかかっているのではないか。中学生にきらわれる先生は、なんとかいうと成績を口にする先生であるらしいことが、子どもたちとの話からわかった。子どもが痛いところをつつかれるからいやらしいと感ずるのかと思ったら、案外そうでもないようであった。成績なんてものは大したことないと思うという子どもがいた。人生の大事ではないということらしかった。もっと大事なことを先生は教えてほしいという中学生もいた。

友だちとのつきあいで、成績というものはどれくらいの役割を果たしているものであるか。小学生は案外そんなことは気にしていないようであった。そのくせ、ひとりびとりの友だちについて、いろいろな評価をしているのである。だれそれは、何が得意で、どういう人間だ——などということ、子どもは子どもらしい表現で語るのである。その中には、成績はよいけれども実力はないなどという言い方もあった。そこにも成績を気にする姿は見られなかった。むしろ、子どもは子どもなりに、全体的な人間観をもっているのだということを感じた。子どものつきあいの仕方は必ずしも成績によらないことはだれも知っている。といつて、それを全然無視しているのではない。しかし、その場合の子どものいう、あるいは考える成績とは、必ずしもおとなのいう成績ではないのではないだろうか。もっと実力的なものかもしれない。おとなのいう成績というものは、そういう点では観念的といえるのではないか。一種の平均点である。その意味ではきわめて抽象的である。

人間的ではないあるものであるともいえよう。子どもはそういうものには案外支配されないのではないか。ある意味でもっと現実的だといってよいであろう。

一つ一つの教科について、おれはどうも不得意だという自覚をもつ子どもは多いようである。いな、ほとんどすべての子どもがなんらかの意味でそういうことを口にした。しかしそれは一般的にいえば気に病むというほど強いものとはいえないようである。

しかし、一般的に成績などということばで聞いたときよりは、はるかにはっきりと、意識して、気にしているということがうかがえるのである。男の子だと、音楽の不得意なのを気にする子どもが多かったが、テストの時などはやはり気になるといのである。女の子だと、体育などは気になる教科であるらしい。しかしこれはひとりびひとり違うといった方がよいであろう。それぞれがそれぞれなやみをもっているということを感じるのである。

小学校の子どもでも、主要四教科などという観念があるらしいということは考えさせられることであつた。おそらく、教師や家庭から教えられたことであろうが、そういう言い方を子どもがするのは、どうも聞いていて感じのいいものではなかつた。

得意の教科が主要の教科である時と、そうでない時とは、なんとなく、子どもの言い方にもちがいがあるように感じられたのも愉快なことではなかつた。もつと、朗らかに、自分の得意なものはこれだといつてもよいと思わせられたし、何でもよいから、子どもにそういう自信をもたせることが大切だと思うのだが、案外こまちゃくれた感じを与えられたのである。

成績がよいわるいというのが、こういう教科の位置づけと関係があるのかもしれない。子どもであるから、はっきりとしたものをもっていないのだが、なんとなく区別をしている。主要教科のよいのが成績のよい子だというような言い方をする子どもは多かつた。したがって、主要教科がわるいのは成績がわるいというように考えるわけである。

しかし子どもは具体的には、どの教科がわるいということ、不得意ということに注意が向けられていることは確かである。一般に成績がわるいということを感じているのではなく、何ができないということを感じるといふ様子であつた。

中学生はそういう点はもつとはっきりしている。自分は何はできない——ということをかかなり明確に自覚している。そしてそのことに関しては、場合によってははっきり劣等感をもっているのではないかと思われる場合があつた。大事な教科ができないので自分はだめなのではないか——というようにいう子どもがいた。一般的に成績を気にするなどと聞いた時には、まああまり気にしないと答えた子どもでも、具体的に、この教科はどうだと聞かれると、どうも不得意でという子どもがいた。一瞬ゆううつそうな顔をするのである。それが、数学とか、英語とかということになると特にそうであつた。ここにはじめて、気に病むということばが使われそうな顔したのである。

しかしそういう子どもでも、得意な教科の話となると、またけっこう朗らかになるのである。特に、それが得意なことは十分意味があることであり、それを伸ばすべきだといつてやると、とてもうれしそうな顔をしたのであつた。

このことからすると、成績を気に病むというのは、具体的には一つ一つの教科に関してのことであつて、あまり一般的、抽象的ないわゆる

る成績ではなさそうである。

いろいろ聞いてみた結果、子どもは結局具体的な気の病み方をして  
いるというように思った。気に病むというのは、それにしても普通の  
子どもの場合には、強すぎる表現のようである。気にするというのが  
よいのではないか。しかし気にするといっても、実はそんなにうまく  
よしているのではなさそうである。あきらめと叫びたつたらまた言いすぎ  
かもしれないが、案外あっさりしているとも感じられる。どうしても  
よくできるようになるかわからないという子どもが多い。

このことは考えさせられた。少し大げさな言い方をすれば、子ども  
はなんとか、できるようにになりたいと思っているのに、それに対する  
処方箋が与えられないのである。今の教育のあり方が問題なのではな  
いだろうか。つまり、いつも十把一からげで取り扱われるので、いつ  
までたっても問題が解決しないらしいのである。現代の教育が個別指  
導ということに重点をおかなくところに問題があるのであろう。

だから別な言い方をすれば、子どもはあきらめている。どうせでき  
ないんだという感じをもっているらしくも思われる。どうしようもな  
い。どうしたらできるようになるのかわからないから仕方がないなど  
という言い方をする。そこへもって来てまわりがよくないのである。  
とかくできない状態に対して、ばかだとか、頭がわるいとかというこ  
とばがはねかえって来る。そういう時は頭に来るのである。子どもに  
言わせると、なにがしかの理屈はあるのである。よく説明してくれな  
いからわからないのだ。聞くとすぐおこる先生がいる。教え方がへた  
だなどいうのである。中学生になると、そういうことはかなりはつき  
り言う生徒がいるのである。

しかしそれでも一般に子どもはのんきだという感じがする。現代っ子  
だからという人がいるかもしれないが、ある点ではそういう状態に免疫  
になっているのかもしれない。あるいはまた、子どもの一種の自衛本能  
がそうさせるのかもしれない。そんなことを一々気に病んでいたら、こ  
の学校生活をやって行けるものか——という子どもがいるのである。

さてしかし、子どもとの話し合いにはやっぱり考えさせられること  
が多かった。それは子どもを育てようとする考え方がおとなの間に見  
られないということ、全体として感じさせられるからである。

成績というようなことを、全体として感じさせられるからである。  
全く縁がない考え方ではないだろうか。成績とは一体何だろうか。特  
に平均点主義の上に立った成績などというものはおとなのひとりよ  
がりではないか。子どもにはそれぞれ特色があつて、それぞれおもし  
ろい行き方をしているのである。ひとりびひとりしてみると、たのも  
しいとさえ思わせる。のびのびと話をしてみると、みんなよい個性を  
もっている。

ところが、こと成績などということをいいますと、とたんに不快な  
顔になる。それはやはり気にしているからなのであろう。しかしそれ  
はまわりから子どもをいじめていることになる。世の中というものは、  
そういうものかもしれない。なにも成績などというものをつくって、  
人と比較しなくてもよさそうなものなのに、どうして競馬の馬のよう  
にすぐ優劣をつけたがるのであろう。全くよけいなことをおとなはず  
るものである。

ひとりびとりを育ててやればよいのであろうに、どうしてあれより  
はこれがよいなどと言いたがるのか。そんなに簡単に人間を比較でき

るはずがないと思うのだが、これは全く点数などというものが生み出した魔術ではないか。本来そんなものは関係ないのだといったような子どもがいたのである。

こうしてみるとおとなの方がおかしいのである。特に親はおかしいかもしれない。親が子どもを点でだけしかみられないとしたらこれは奇妙なことである。子どもを客観的に見るというのはそんな形式的なことではあるまい。

成績を気に病むというのは、そういうように考えると、もう病的になっている状態かもしれない。まずおとなが病気になるっている。その影響で子どもが病気になるっているのではないか。

全般的な劣等感というようなものが子どもに生まれるのは、病気のせいではないか。教育がわるくて、よくわからない。どの教科もそうである。そこへ頭がわるい、生まれつきばかじやなかろうかなどといわれたとしたら、だれでもくさざざるを得まい。中学生になるとそういう状態に陥るのは、入学試験などというものがあるからかもしれない。小学生でも、いち早く入学試験を心配する親の子どもには、そういうものが生まれるのではないだろうか。今の教育は、子どもをそういう病気になる方向へと向かっているような気がするのである。

(教育評論家)